公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●おぎおんさぁに関する調査**

**・近年の一番神輿参加者数について**

１．一番神輿参加数推移　　（一番神輿を担ぐ会からの動員は除く）

| | ＪＣメンバー | 一般参加者 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 2015 | １２４名 | ２０１名 | ３２５名 |
| 2016 | １１３名 | １４３名 | ２５６名 |
| 2017 | １１６名 | ８７名 | １９３名 |
| 2018 | ７５名 | ８５名 | １６０名 |
| 2019 | ７３名 | ９７名 | １７０名 |
| 2020～22 | 新型コロナウィルスにより、本祭中止。並びに縮小開催。 | | |
| 2023 | １０９名 | １６８名 | ２７７名 |

２．一般参加者理由

| | JC メンバー紹介 | ＳＮＳ等 | メディア媒体 | 協力団体 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 2015 | ３０名 | 0 | 0 | １６８名 | 3名 |
| 2016 | ５９名 | 0 | 0 | ８４名 | 0 |
| 2017 | ４４名 | 0 | 2名 | ４３名 | 0 |
| 2018 | ４２名 | 0 | 3名 | ４０名 | 0 |
| 2019 | ５１名 | 3名 | 1名 | ４２名 | 0 |
| 2023 | １０２名 | 0 | 0 | ６６名 | 0 |

３．こども神輿参加者推移

| | こども神輿参加者 | 保護者 | 合計 | |
|---|---|---|---|---|
| 2015 | １１２名 | ５６名 | １６８名 | |
| 2016 | １２１名 | ６３名 | １８４名 | |
| 2017 | １０８名 | ４１名 | １４９名 | |
| 2018 | ６８名 | ４７名 | １５５名 | |
| 2019 | ４２名 | ２５名 | ６７名 | 中止 |
| 2020～22 | 新型コロナウィルスにより、本祭中止。並びに縮小開催。 | | | |
| 2023 | ２７名 | １９名 | ４６名 | |

４．こども神輿参加者理由

| | JC メンバー紹介 | ＳＮＳ等 | メディア媒体 | 協力団体 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|
| 2015 | ６４名 | 0 | 3名 | ４４名 | 0 |
| 2016 | ７１名 | １０名 | 0 | ４０名 | 0 |
| 2017 | ３８名 | １７名 | 0 | ５３名 | 0 |
| 2018 | ４６名 | 0 | 0 | ２２名 | 0 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 2019 | １３名 | 0 | 0 | ２５名 | ４名 |
| 2023 | ２７名 | 0 | 0 | 0 | 0 |

**●分析**

コロナ前の過去５年間における開催では、JC メンバーは会員数の減少に伴うが平均して５割から６割のメンバーが参加していて、一般参加者の動員は２日間開催だったことを考慮すれば安定しているように思われる。2023 年一番神輿においては参加者が増加しているが、宵祭での渡御がなく、土曜日の動員がない分、日曜日に絞って動員できた為だと思われる。2024 年度がどういった形での開催になるかわからないが、３年間の本祭中止により、JC メンバーにも神輿の未経験者が増えている現状で、一般参加者についても、今後、高齢化や地域コミュニティの衰退などによる担ぎ手不足も念頭にいれていかなければならない。

また、一番神輿、こども神輿ともに JC メンバーからの紹介と協力団体による参加が９割を占めていて、SNS やメディアの効果はあまりみられない。

JC メンバーによる紹介や一番神輿を担ぐ会、一番神輿友の会などの協力団体、各地で祭りを運営する団体とのつながりをより強固なものにし、持続可能な体制づくりをしていく必要がある。また、JC メンバーの参加率の向上を計り、神輿経験者を増やし、次世代につなげていく必要がある。

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●おぎおんさぁと一番神輿に関する調査**

**鹿児島と祇園祭の関わり～時系列～**

| 歴史 | 概要 | 人名・参加員数 |
|---|---|---|
| 869 | 全国にある八坂神社を持つ地域は祇園社主導開催。開催基準は「疫病退散」つまり疫病が流行っている年のみ | 初期の祇園祭 |
| 江戸時代 | 鹿児島で初めて「祇園祭」開催。当時は、諏訪大祭、稲荷やぶさめ、祇園祭の３大祭り。現存は祇園祭のみ | |
| 祇園祭初期 | 一番神輿は、自衛隊・消防隊員交代で担いでいく。重量・大きさによって次第に薄れていく。 | |
| 1632 | 神輿作成（初期型）が始まったといわれる年。上町から下町へ受け渡された | 寛永９年 |
| 1728 | 清水町に遷宮され、鹿児島に八坂神社が生まれた | 享保１３年 |
| 1962 | 納屋通り商店街の青年部が祇園祭に初めて神輿を担ぎだす。 | |
| 1969 | 一番神輿が岩崎産業倉庫へ保管される | |
| 1979 | ＪＣ太鼓、こどもみこし先導として参加。 | |
| 1982 | 春まつり推進５か年計画実施の一つとして、「日本の代表的まつりの観客動員数及び内容を調査する」 | 前田　利一郎 |
| 1982 | 岩崎産業倉庫にて、１３年間眠りつづけた一番神輿を青年会議所が見つける | |
| 1983 | 7/24 祇園祭　子供みこし、ＪＣ太鼓として参加：地域文化委員会　酒井登志夫 | ＪＣ103 人 |

| | | |
|---|---|---|
| 1984 | 指導力開発委員会　竹之内雄作の元、責任者宮内一声を中心に　JC として初めて担ぐ一番神輿　１３年ぶりの神輿 | ＪＣ120 名<br>+参加者 29 名 |
| | | 初代頭　竹之内雄作 |
| 1985 | 初めて「郷土（ふるさと）づくり」と委員会名を変更 | ２代目頭　宮内一声 |
| 1994 | 八坂神社が平ノ町から移転。現在の祇園之洲へ移る。 | |
| 1995 | 鹿児島祇園睦会　構想・発足へのあしがかり | |
| 1999 | 鹿児島ＪＣが、女性市民神輿六番神輿を立ち上げる。 | |
| 2001 | 鹿児島祇園睦会発足 | |
| 2002 | 鹿児島祇園睦会より、締め込み姿での全員参加。 | |
| 2005 | ＪＣでの子供みこし復活。一番神輿振興会発足 | |
| 2006 | 水害による本祭中止 | |
| 2012 | ７月１１日、鹿児島祇園祭は、鹿児島市文化財保護条例第４条の規定に基づき、鹿児島市無形民俗文化財に指定 | 大渕脇正太 |
| 2018 | 鹿児島での祇園祭１５０周年 | 立山修介 |
| 2019 | 大雨による本祭中止 | 渡邉卓真 |
| 2020～21 | コロナウィルス感染症拡大による中止 | 濵田賢太郎～門園均 |
| 2022 | トラック巡幸による縮小開催 | 門園均 |
| 2023 | ４０代一番神輿。４年ぶりおぎおんさぁ通常開催 | 池之上正三 |

**●分析**

1984 年に鹿児島青年会議所としての一番神輿が初代頭　竹之内雄作先輩のもと２、３代目頭　宮内一声先輩が主導して開始された。神輿を担ぐ前もＪＣ太鼓として参加していたが、神輿を担ぎだすきっかけは、まちを元気にするという強い思い、祭りへの熱き想いが始まり。これまで脈々と引き継がれた想いが、「鹿児島市無形民俗文化財」へとつながった。祇園祭の最初の始まりの歴史は深く、疫病が流行した年の「疫病退散」が始まりである。

一番神輿に御神体を載せ、まちやひとの無病息災、悪疫退散、商売繁盛を願い粛々と渡御することで、祇園祭という神事であることを伝え、継承していくことに意義があると思う。

青年会議所の先輩方が倉庫に眠っていた一番神輿を引っ張りだし担ぎ出したという熱い想いを途絶えさせることなく青年会議所が先導して祇園祭を盛り上げていくことが一番神輿の継承につながると考える。

また、引き継ぐべき部分、変えていく部分を見極め、次世代に継承し得る形式を模索していく必要がある。

参考資料：

「二十五年目のソイヤ」

「情熱活火山」

「商工会議所おぎおんさあの歴史」

作成者

平成二十年社団法人鹿児島青年会議所

平成十六年社団法人鹿児島青年会議所

商工会議所ＨＰより抜粋

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●他地域の伝統文化、祭りに関する調査**

**中条祭り**（兄弟 JC である中条 JC が運営に関わる）

・胎内市

新潟県の北東部に位置し、市内には飯豊連峰が源流となる胎内川が流れ、海、山、里が 一体となった胎内市は、季節ごとにまちの風景が移り変わり、特産品も花や野菜、お酒など自然の恵みを活かしたものが沢山ある。春はチューリップフェスティバル、夏は胎内平で森林浴、 秋は民謡流しや神輿渡御が行われる中条祭り、そして冬は日本百名山の飯豊連峰の山頂付近がいち早く雪化粧をし、胎内市に冬の訪れを知らせる景観のひとつとなっている。

・中条祭り（なかじょうまつり）

新潟県胎内市熊野若宮神社の例大祭のこと。毎年９月３日から９月６日にかけて行われる。 古くは「熊野若宮神社大祭」と呼ばれており、昭和４８年（１９７３年）から昭和５３年（１９７８年）までは「中条町振興まつり」、昭和５４年（１９７９年）から「中条まつり（中条祭り）」と呼ばれている。また「中条大祭」と表記される場合もある。本町通りから熊野若宮神社境内にかけて、２００軒ほどの出店が立ち並ぶ。

・日程

９月３日 民謡流し

９月４日 出店・山車（煽り合い）・台輪等 製作中の山車（驛新組）

９月５日 出店・山車（５組の山車による一斉煽り合い）・台輪・神輿・朝太鼓・他イベント多数

９月６日 出店・山車（煽り合い）

※２０２３．９．５　現地視察

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●他地域の伝統文化、祭りに関する調査**

京都八坂神社　祇園祭（全国の八坂神社　祇園祭系列の本家）

祇園祭は千年以上続く歴史の長い祭り。古くは祇園御霊会（ぎおんごりょうえ）と呼ばれ、平安時代前期の 869 年に、京都各地ではびこる疫病を鎮めるべく行われたのがその始まりとされている。当時は、平安京の庭園である神泉苑に３つの神輿と 66 本の鉾を立てて祇園の神々を祀ったとのこと。祭りの規模が大きくなっていったのは平安時代の中頃から。神輿渡御（みこしとぎょ）、田楽（でんがく）、猿楽（さるがく）などが加わり、町衆のお祭りとしての色が濃くなっていく。その後、室町時代に入るにつれて祭りはどんどん豪華になる。

毎年７月１６日（前祭）、２４日（後祭）に行われる「山鉾巡行」「神輿渡御」が最も盛り上がることで有名。

三基の神輿には、それぞれ八坂神社の主祭神である、素戔嗚尊（スサノオノミコト）、櫛稲田姫命（クシイナダヒメノミコト）、八柱御子神（ヤハシラノミコガミ）が載る。

※２０２３．７．１６　現地視察

**●分析**

京都祇園祭と中条祭り、規模は違うものの、共通して神事であるとともに地域に深く根付いた祭りであり、開催日時は平日に関係なく、決まった日にちに開催される。共に夕方から夜にかけての神輿渡御で、大人から子どもまで年代関係なく祭りに参加していたのが印象的だった。

鹿児島のおぎおんさぁでは、なかなか同じような日にち固定の開催は難しいと思うが、開催時間や神輿の手法など参考に出来る部分が多くみつけられた。

なによりその祭りや地域を愛する人たちばかりで、まちが活気に溢れていた。

まちづくりにはひとが欠かせないことを再認識した。

関係団体と連携をとり、参考にできることなどは積極的に取り入れられる体制をつくっていく必要がある。

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●他地域の伝統文化、祭り、地域コミュニティに関する調査**

八坂神社　秋祭り（鹿児島）

２０２２年より、八坂神社、一番、弐番、参番神輿が中心となり、始まった八坂神社秋祭り。

２０２３年は八坂神社に奉納されている旧三番神輿での渡御。

神輿渡御の他、神楽や九面太鼓の演奏に加え、屋台も立ち並び、地元の氏子を中心に、賑わいをみせた。

※２０２３．１０．１４

**●聞き取り、分析**

２０２２年の秋祭り立ち上げから関わらせていただいているが、開催されて２年目となり、初年度に比べ、運営もスムーズになり、祭りを見に来るまちの人も増えたように思う。

八坂神社の岩切禰宜曰く、「神輿連中や出演者は勿論だが、地域の方々に楽しんでいただくのが一番。

地元の神社が元気な地域には活気が生まれる。」

禰宜や弐番、参番神輿との来年に向けた話し合いのなかで、まだまだ周知が足りないこと、１週前にはかんまちあで、翌日には石橋公園でイベントがあり、来年はどうにか連携して日程調整できないものか、など市や地域コミュニティとの関わり方も課題となった。

祭りや地域を愛する人で、神社を中心に地域が活気に溢れる。子どもからおじいちゃんおばあちゃんまでが交流でき、楽しめる昔ながらなまち。

まちづくりには地域への希望と愛着が大切なのだと思う。

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●他地域の伝統文化、祭り、地域コミュニティに関する調査**

一之宮神社　豊年祭り（鹿児島、中郡）

鹿児島市においては、「おぎおんさぁ」と一之宮神社の神輿のみ道路交通使用許可のおりている祭事。

地元の氏子のみで神事から神輿渡御まで執り行う、地域の伝統的な祭りである。

毎年１１月９日に五穀豊穣を祈って行われる。

※２０２３．１０．１４

**●聞き取り、分析**

地域の伝統文化であり、鹿児島市においても貴重な神輿渡御を伴う祭であるが、地元に暮らす人々の周知は非常に少ないように感じる。また、１１月９日という日にち固定の上、午前中から正午過ぎの開催のため、祭りに関わる人も少なく、運営は、鴨池、中郡地区の町内会や消防団、おやじの会などで行っているが、高齢化がすすみ、宮入りのみ担ぐものの神輿はほぼトラックに載せての渡御である。

また、小学校に隣接する神社にも関わらず、子どもたちは通常授業で祭りのことさえほぼ知られていない。

地域の伝統文化を子どもたちに知ってもらい、継承していくためにも、来年は神事のみ９日に行い、前週の土曜日に神輿渡御を行うなどの意見もでている。若い世代が積極的に参加し、継承していくためにも新しい体制や地元の商店などとの連携が必要かと思われる。

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●地方自治体による地域活性の事例**

**■戦国宝探し｜一乗谷朝倉氏遺跡**

福井市は、平成 27 年に「福井市まち・ひと・しごと創生 人口ビジョン・総合戦略」を策定し、将来に希望を持てるまちづくりを進めてきました。なかでも有名な一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国時代に越前の国を支配した朝倉氏の城下町跡です。武家屋敷や寺院、職人屋敷、道路にいたるまで街並みがほぼそのまま発掘され、国の重要文化財・特別史跡・特別名勝に指定されています。今回は、その一乗谷朝倉氏遺跡にて「戦国宝探し」を実施しました。武家屋敷や庶民の町屋をリアルに再現した復興町並で、戦国時代の気分に浸りながらイベントを楽しめます。

戦国宝探しとは、宝の地図を手に謎を解きながらエリア内に隠された宝箱を探し出す、周遊型謎解きゲームです。実際の場所に行かないと解けない謎を解いたり、ヒントの掲示された店舗に足を運んだりすることで、地域を楽しく周遊できます。参加者がさまざまなところへ出向く戦国宝探しは、地域活性化につながるイベントとして最適です。

**■チャンバラ合戦を利用した山城 PR｜可児市**

10 もの山城跡を持つ岐阜県可児市は、地方創生の一環として、山城の PR を積極的に行っています。可児市山城連絡協議会の結成や地元民による山城保護団体の設立など、地元住民を巻き込んだ様々な取り組みを実施してきました。
しかし、可児市には大きな課題がありました。それは、まちづくりに関わる人たちに若者が少ないことです。就職や結婚を機に地元を離れてしまう若者が多いという現状を変えるために、幅広い世代の協力による地域活性化を行い、地元民の地元への誇りや愛着を取り戻す必要がありました。
また、「城跡の活用」には難しい側面がありました。それは、現存するお城とは違い、見た目も華やかでないために、城跡や歴史マニア以外の層をなかなか惹きつけられないということです。
これらの課題を解決するために実施したのが、体験型歴史アクティビティ「チャンバラ合戦」の年間開催でした。チャンバラ合戦–戦 IKUSA-とは、スポンジ製の刀で相手の腕についたカラーボールを落としあう、チームで戦う戦国アクティビティです。自らが「サムライ」になりきれるこのイベントは話題を呼び、2016 年からののべ参加人数は 1 万人越え。歴史の要素をうまく取り入れ、「遊び」という切り口から、市内外の多くの参加者に山城の魅力を PR することができました。
また、このイベントはチャンバラ合戦の企画・運営を行う株式会社 IKUSA および NPO 法人ゼロワンのサポートのもと、主に地元の住民によって運営が行われてきました。参加者に楽しんでもらうための企画・運営やリピーターを増やすための集客方法を住民自らが考えることで、若者が主体的に地方創生に関わることができた事例です。

**■「金魚が泳ぐ城下町」賑わい創出事業｜大和郡山市**

奈良県大和郡山市は、金魚養殖の三大産地として知られています。全国金魚すくい大会などのイベントを実施していましたが、一時的な賑わいを見せるもののうまく街なかに誘導できないという課題を抱えていました。そこで、街全体をあげての賑わい創出事業を行いました。

- 平成 28 年に郡山城の天守台が復元されるのに合わせ、天守閣が復元されるアプリを開発
- 街中の魅力を高めるための散策案内を作成
- 金魚がみられるスポットでの、「デジタル金魚コレクション」の獲得
- 金魚鉢デザインコンテストの優秀作品を街なかに配置

- 周辺店舗の負担によるクーポンの提供

地域に元からある資源をうまく活用し、地元商店街のクーポン提供など、地域住民と協力した取り組みが積極的になされました。ただ市内に観光客を入れ込むだけでなく、そこでお金を落としてもらえるような仕組みづくりがなされた点も、参考にしたいポイントです。

**■県民の日を制定｜千葉県**

千葉県では6月15日を千葉県民の日として制定し、学校休業日として設定しました。それにともない、千葉県民の日は親子で学べるイベントや、地域理解を深めるイベントをさまざまな市区町村の団体で実施。地域について学ぶ機会を提供するとともに、地域活性化を図りました。

実際に千葉県民の日は、施設の無料開放や割引などを行う300件以上のイベントが実施されています。地域について学ぶ機会を自然と設けることで、地域活性化を促すことができた事例です。

https://ikusa.jp/2020052610114 より抜粋

**分析**

地域にある資源や産業、強みに着目し、それらを活かせるような解決方法を導き出すことが大切である。
企業や地域団体、住民たちと連携をとることで、より多くの人が主体的に取り組むことができる。
一過性のものとして終わらせるのではなく、地域の活力を保ち続けることのできる、持続可能なモデルやシステムを作っていくことが大切。

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●地域コミュニティに関する調査**

**１．地域の現状と課題**

（１）人口・世帯

○鹿児島市は、約60万人と九州第4位の人口を有しており、南九州の拠点都市となっています。市内は9つの地域に分かれており、最も人口規模の大きな中央地域で約29万人、最も小さな桜島地域で約5千人とその規模もさまざまです。

本市では少子高齢化が進んでおり、地域差はあるものの、ほとんどの地域で年少人口（15歳以下人口）割合は減少し、老年人口（65歳以上人口）割合は増加傾向にあります。

（２）地域課題

○地域の課題として「福祉」、「安全」が重要であると認識されています。

令和4年度に実施した市民アンケート調査によれば、7割以上の市民が「高齢者の世話や介護」「防犯対策や交通安全対策」「災害予防や避難対応」などの地域課題が「非常に重要である・かなり重要である」と認識しています。

福祉や安全は重要な地域課題と言えます。

## ２．地域コミュニティ組織の現状と課題

（１）参加状況

○代表的な地域コミュニティ組織である町内会への参加は、半分以下となっています。

市民アンケート調査によれば、地域コミュニティ活動として、町内会に関する認知度は 68.8%と比較的高いものの、実際に町内会の活動に参加している人は全体の 48.5%にとどまっています。

＜主な地域コミュニティ組織の認知度＞

・町内会　68.8%
・あいご会　39.1%
・老人クラブ　38.3%
・防犯パトロール隊　33.4%
・ボランティア　31.8%

（２）運営面での課題

○町内会ではメンバーの高齢化と人材不足が課題で、複数の地域コミュニティ組織を兼務する役員もおり、負担が偏っています。また、地域ごとの個別課題へのきめ細かな対応の必要性や、町内会未加入に伴う会費収入の低下等も課題として指摘されています。

地域コミュニティ組織へのアンケート調査によれば、約半数の町内会が「活動の中心となるメンバーの高齢化」「役員等の人手不足」を運営面での課題として挙げています。校区公民館運営審議会、校区社会福祉協議会などの地縁型組織では、活動メンバーが町内会の会長・役員と重複している団体が多く、一部の人に負担が偏っています。

また、町内会等への聞き取り調査では、高齢化、少子化など地域ごとの課題（独居老人の見回り等）への対応の必要性、町内会への未加入が進む中で運営経費の確保が困難となっているという指摘もされています。

＜町内会の運営面での主な課題＞

・高齢化　50.8%
・役員不足　45.7%
・会員数の減少　42.6%

（３）連携状況

○小学校区などにおける多様なコミュニティ組織により構成される地域コミュニティ連携組織が立ち上げられた場合、約８割が「ぜひ参加したい・前向きに検討したい」と参加意向を示しています。

地域コミュニティ組織へのアンケート調査では、町内会は校区公民館運営審議会や校区社会福祉協議会と連携する割合が高く、校区公民館運営審議会はそれぞれの地域コミュニティ組織から代表者が集まる場としての役割を果たしています。その結果として町内会と小学校との連携が数多くみられ、地域独自の取組みも生まれています。

地域コミュニティ連携組織が立ち上げられた場合、町内会をはじめ地域コミュニティ組織の約８割が「ぜひ参加したい・前向きに検討したい」と参加意向を示しています。

＜町内会が連携する他団体＞

・校区公民館運営審議会　74.8%
・校区社会福祉協議会　61.2%
・小学校　57.1%
・他の町内会　50.2%
・中学校、高校　35.0%

### ３．地域コミュニティ組織の支援施策と要望

○鹿児島市では地域コミュニティ組織を支援してきましたが、若い人でも参加しやすい仕組みづくり、既存組織に留意した地域コミュニティ連携組織づくりなどが求められています。

本市では、地域コミュニティ組織の活動を側面から支援するため、講座・研修、情報提供、補助金等の助成、その他（委員報酬、事業委託等）さまざまな事業を実施しています。

また、町内会などの地域コミュニティ組織からは、若い人でも参加しやすい仕組み（例えば青壮年部の設立等）の検討や既存の組織との棲み分けに留意した地域コミュニティ連携組織の検討などが求められています。

参考：鹿児島市ホームページ

### ●分析

少子高齢化と核家族化が進行しており、地域課題に対して地域コミュニティによる対応が期待されている。

しかし、代表的な地域コミュニティである町内会への市民の参加は減少し、また、メンバーの高齢化や人材不足が問題になっている。

地域コミュニティを活性化するためには、若い世代が参加しやすい体制づくり、地域コミュニティ同士の連携が必要かと思われる。

情報共有や啓発活動を積極的に行い、地域に暮らす人々が、地域活動に触れる機会を増やし、実際に活動への参加を促すことが必要だと思われる。

### ●中郡地区地域コミュニティに関するヒアリング

**鴨池町内会の主な活動**

・敬老会

・日枝神社六月灯への参加、協力

・おはら祭りへの参加

・十五夜会（相撲、綱引きなど）

・年末のこども夜警（火の用心）

・中郡小学校の各種行事への参加、協力　　など

**郡元町内会の主な活動**

・敬老会

・一之宮神社六月灯への参加、協力

・一之宮神社豊穣祭りの神輿運営

・中郡小学校、鴨池中学校おやじの会との連携（防犯パトロールなど）

・中郡小学校、鴨池中学校の各種行事への参加、協力

**●聞き取り、分析**

地域の子供たちに向けた活動が多く、また、地元の神社の行事や祭り、十五夜会などの伝統文化の継承に積極的である。しかし、昔に比べて、おはら祭りへの参加に向けた練習がなくなったり、六月灯に向けて公民館に集まって灯篭をつくることがなくなったりと地域の子供たちの参加の減少や規模の縮小が問題になっている。地域の神社や公民館を通して、地域のお年寄りと子供たちの交流が盛んだった頃を懐かしむ高齢の役員の方々の姿が印象的だった。

また、子供たちの親世代の参加もみられるものの、決まった人たちが少数参加している現状である。

高校生、大学生、20 代の参加者はほぼみられない。

若い世代が積極的に関われる体制づくりや機会の提供が必要かと思われる。

公益社団法人　鹿児島青年会議所　地域活性化委員会

２０２４年度　調査分析シート

**●鹿児島における災害に関する調査**

**鹿児島における過去の災害年表**

参考資料：一般社団法人　九州地域づくり協会　ホームページより抜粋

**●分析**

上記年表から、鹿児島における災害の大半は、台風や大雨による土砂災害や洪水被害とみてとれる。

鹿児島は、上記の災害の他にも地震や桜島の噴火による災害、自然災害と別に、原発や近隣国の武力による有事被害など、有事災害が起きうる可能性となる条件が多い県であることは周知である。

災害に備えることが、もちろん最も重要であるが、災害が発生してしまった場合は鹿児島青年会議所がこれまで協力関係を築きあげてきた、行政や自衛隊、各団体と連携をとり支援窓口を設置する必要がある。